

図 3-19 熔鉱炉跡出土遺物 (9)  
 (網部：110：被熱変色、112～117：鉄分付着)

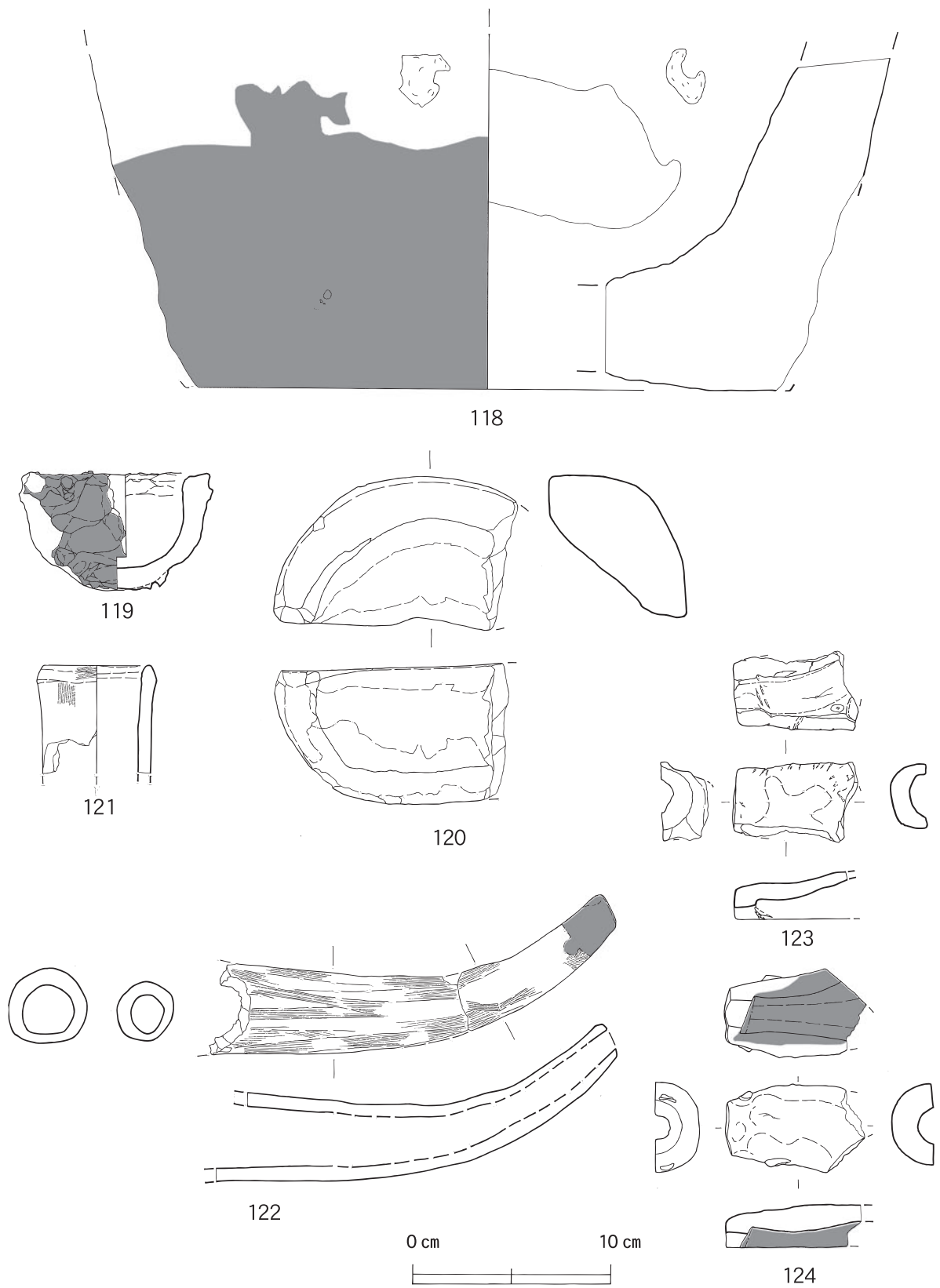


圖 3-20 熔鋇炉跡出土遺物 (10)  
 (網部：118・124：被熱剝離・変色、119・122：鉄分付着)

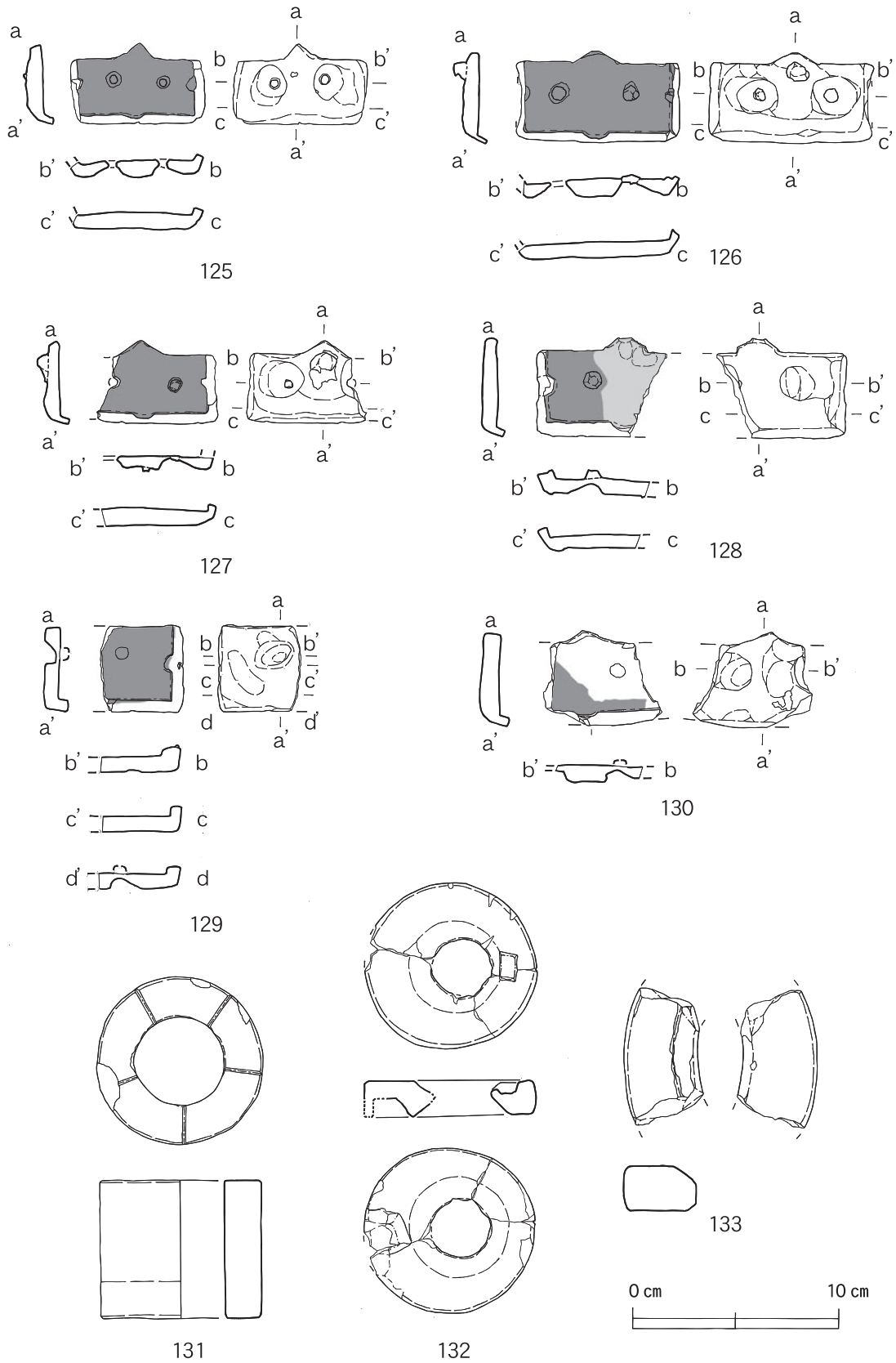


图 3-21 熔鉱炉跡出土遺物 (11) (網部：被熱変色)

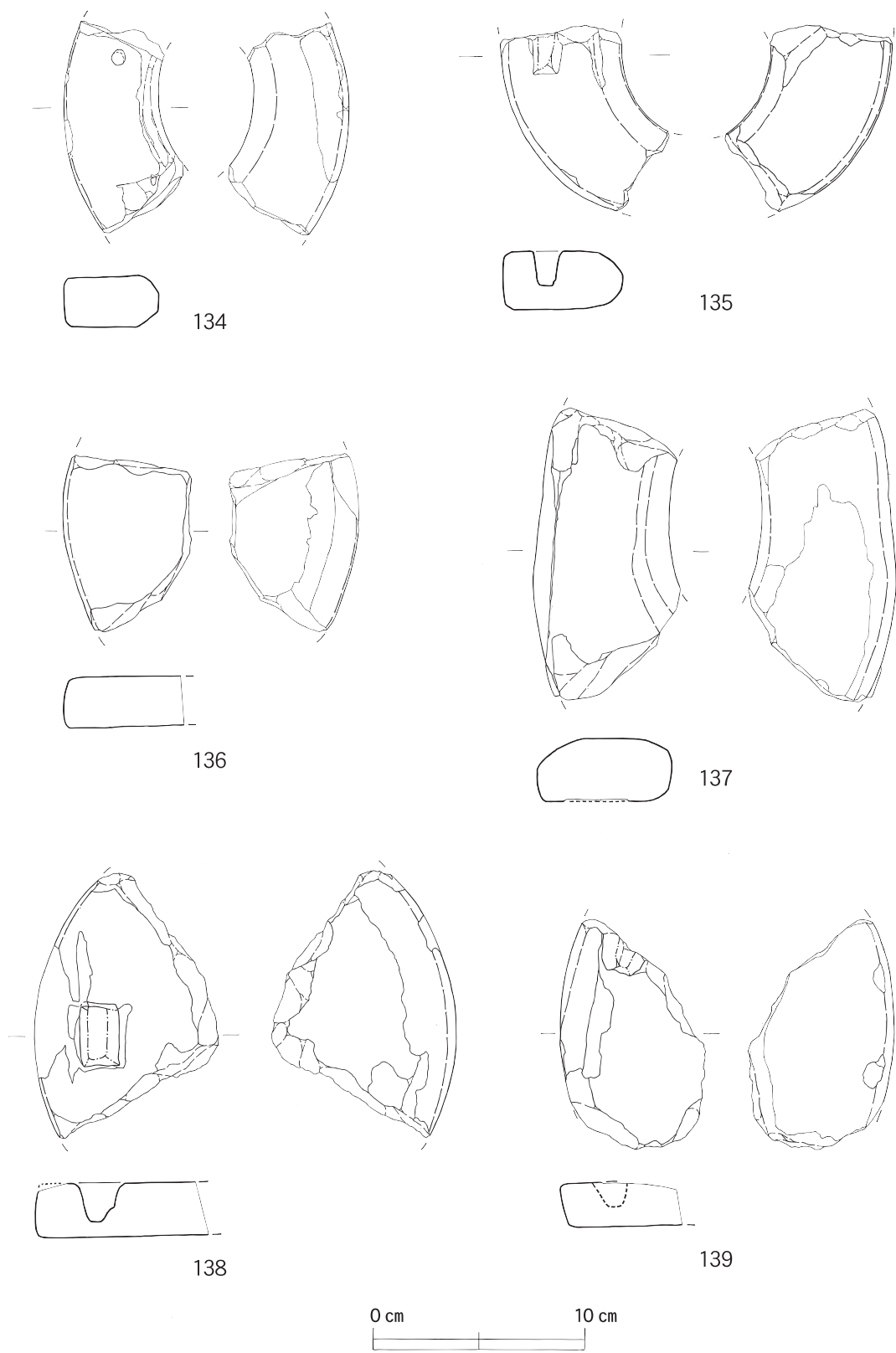


图 3-22 熔鉢炉跡出土遺物 (12)

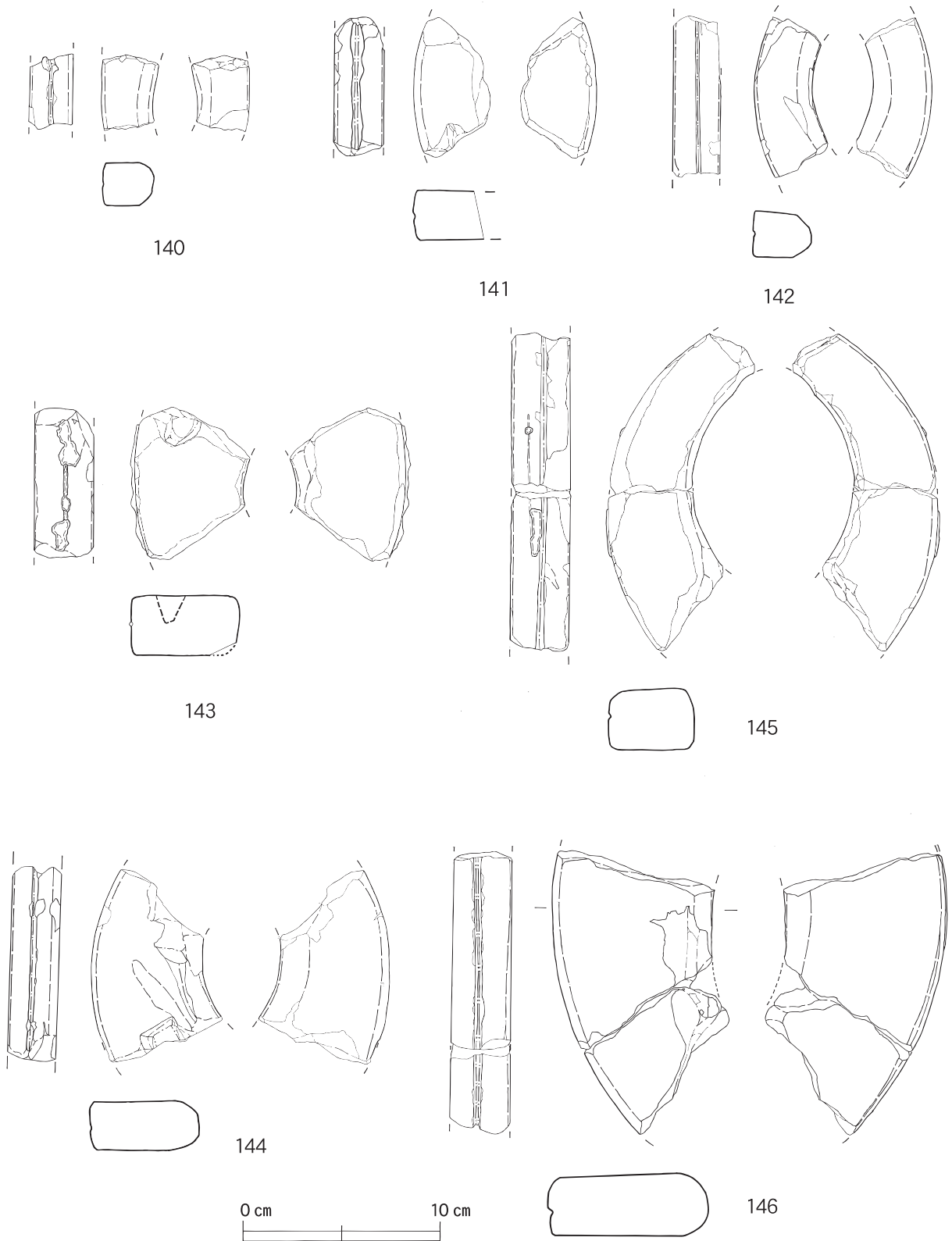


图 3-23 熔鉢炉跡出土遺物 (13)

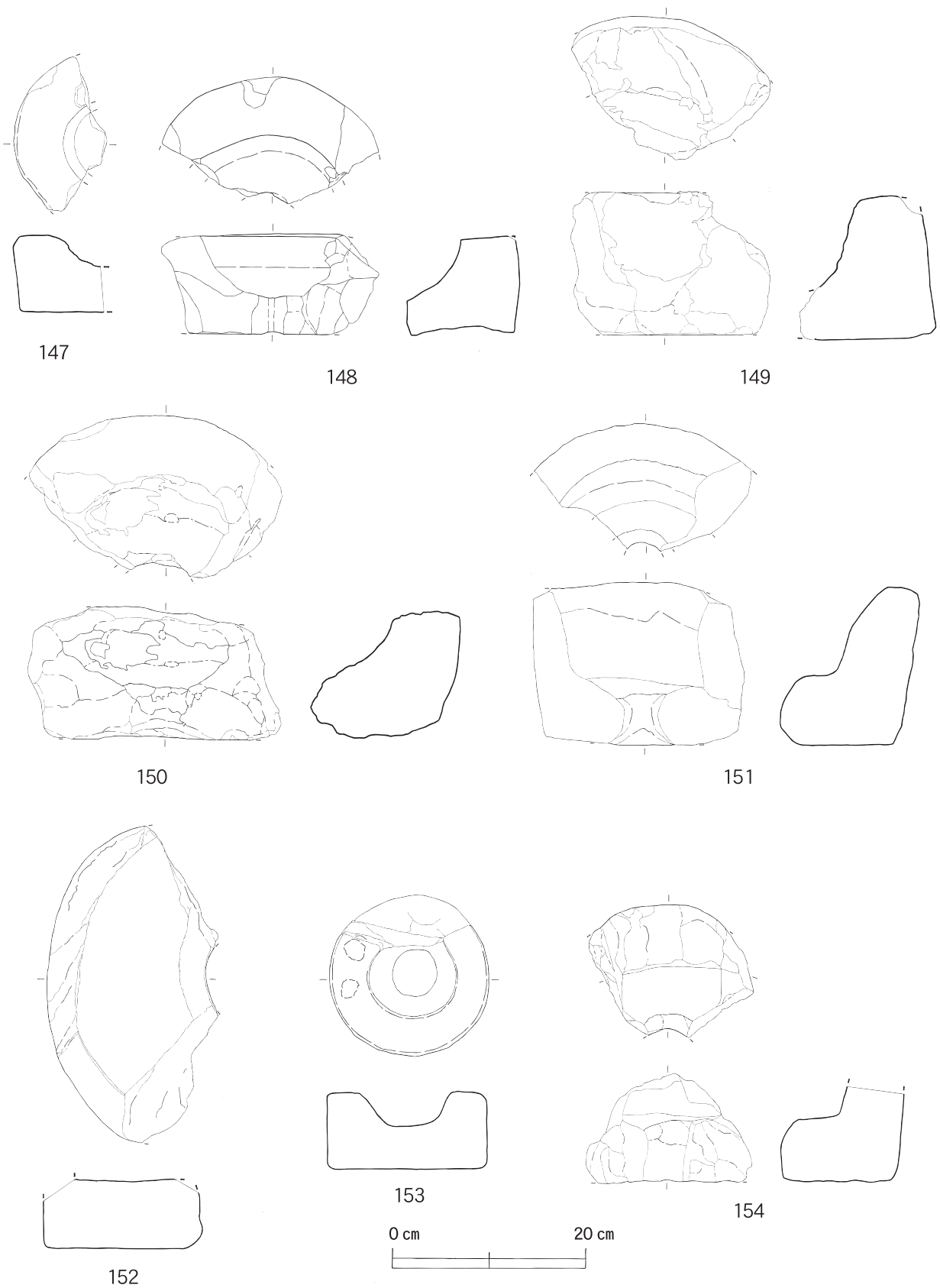


图 3-24 熔鉱炉跡出土遺物 (14)

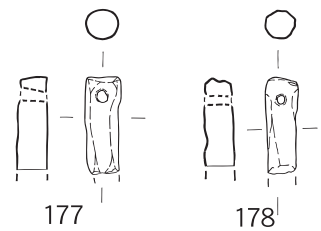
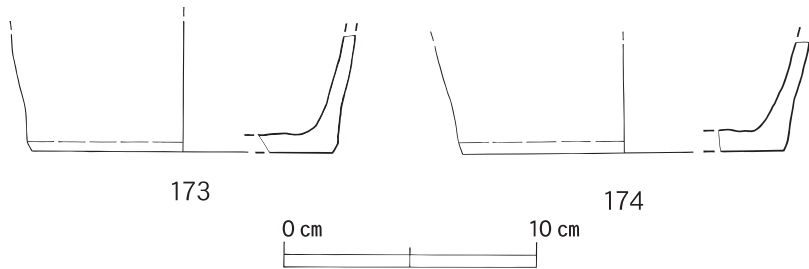
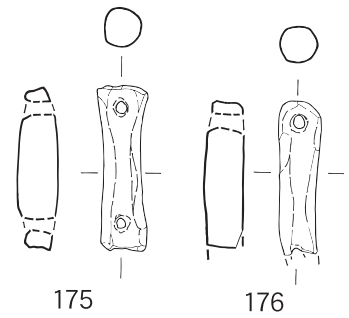
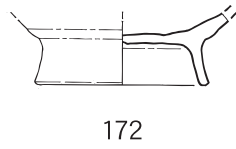
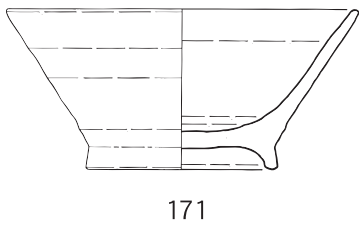
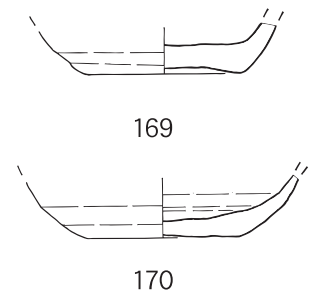
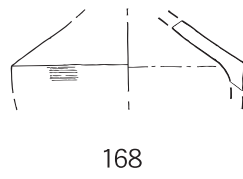
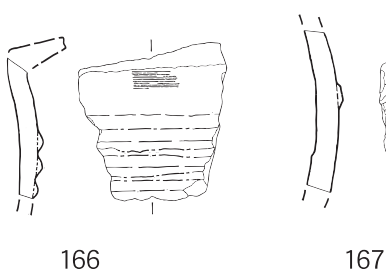
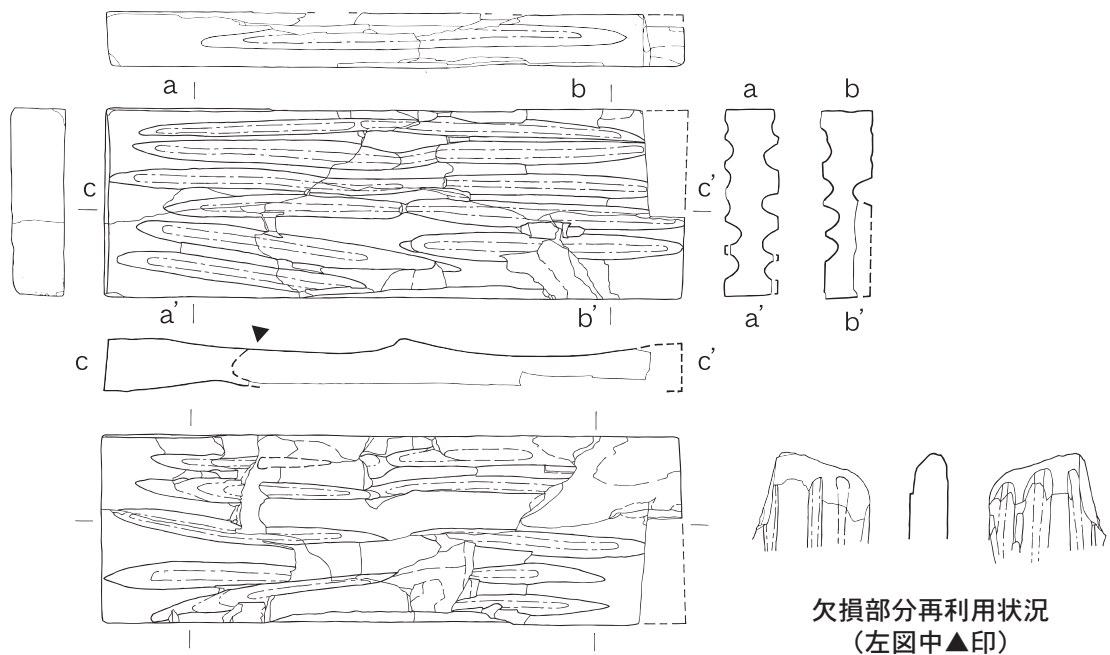


图 3-25 熔鋳炉跡出土遺物 (15)

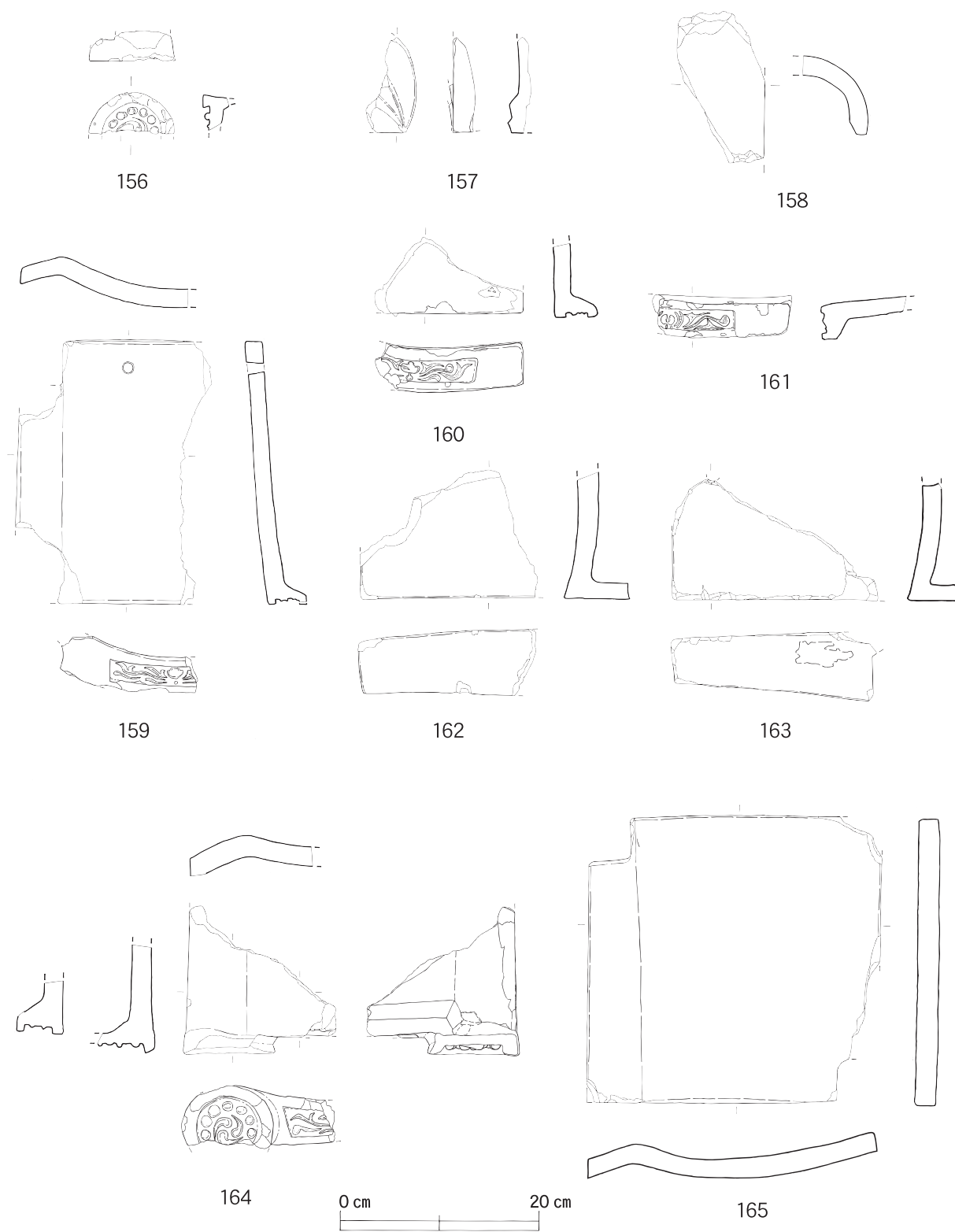


图 3-26 熔鉢炉跡出土遺物 (16)



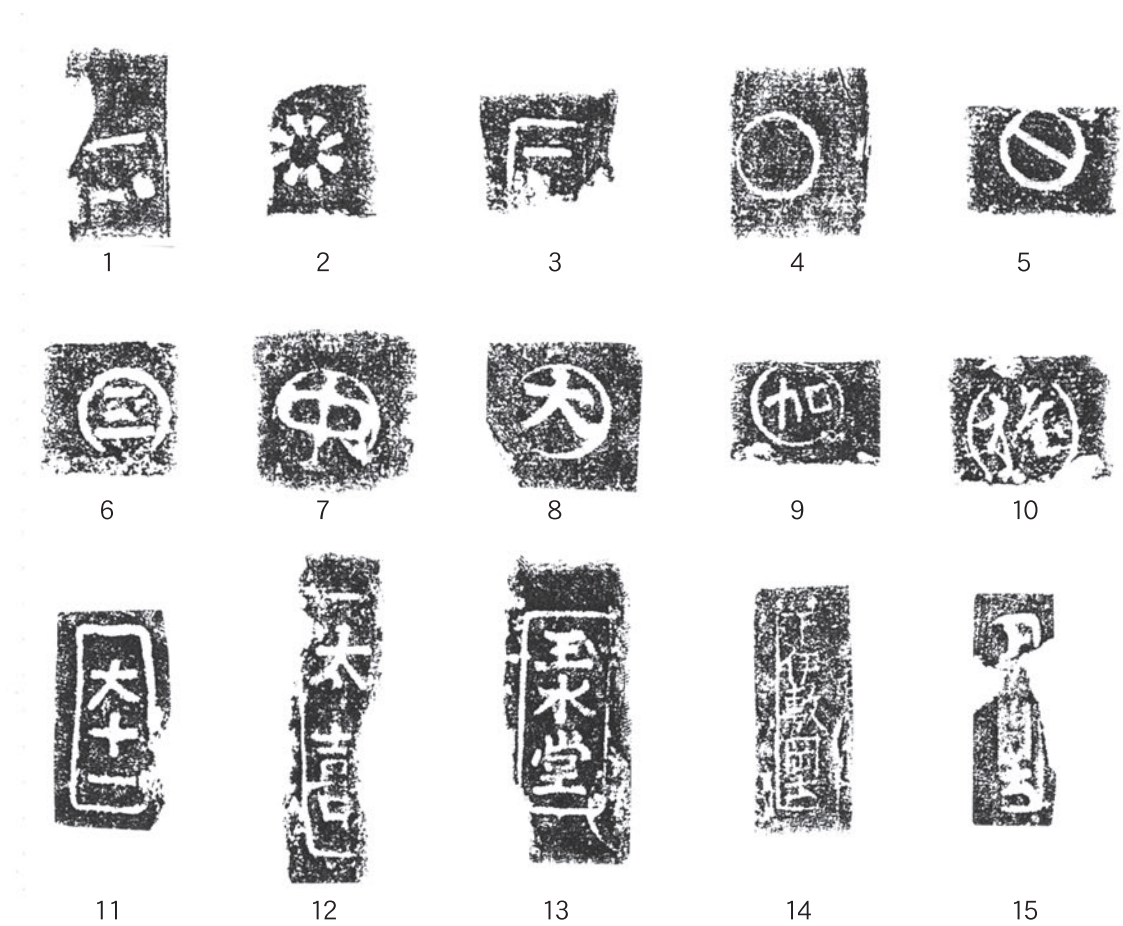


図 3-27 熔鉱炉跡出土瓦印銘

185～188は和釘である。和釘と思われる鉄製品は20点近く出土しているが、残りのよい4点のみを報告する。長さは約8～10cmで、いずれも頭部がL字状をなし、断面が方形を呈する。189・190はクサビ状鉄製品である。189は断面略円形で片端が反っている。190の断面は方形であるが、先端部はやや丸みを帯びる。

これら鉄製品のうち、カスガイやボルト状鉄製品、和釘などは、比較的大型の木製品に用いられた可能性があり、その可能性のひとつとして水車を想定することも不可能ではない。しかし水車に用いられたことを確定するのは、現段階では困難である。

191～200は青銅製品である。191～194は板状で、用途は不明である。うち194に見られる穿孔は本来のものと思われ、先述した「硯状土製品」を鋳型として製作した可能性もある。195・196は板状青銅製品を折り曲げている。195は長辺で、196は短辺でそれぞれ折り曲げられている。196の折り曲げが本来的なものかどうかは判断が難しい。

197は断面円形を呈するL字状青銅製品、198も断面円形の棒状製品である。199は幅0.2cm、厚さ0.1cmの銅線を三重に螺旋状に巻いている。200もリング状であるが、199に比べると幅広で、また巻き方も弱い。

201～203は銅銭で、201・202は寛永通宝である。203はいわゆる「鳩目銭」をまとめた。鳩目銭はB-2区水路跡1から78点、D-1区から4点出土している。残りのよい18点を掲載した。

(渡辺芳郎)

表3-1 集成館熔鉢炉跡出土資料観察表(1)

※数値の単位はcm(以下同)

No.	調査回数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備考
1	2次	F-9 III層	陶器	白薩摩	碗		11.6	5.4	4.0					染付千鳥印。近世。
2	2次	F-10 III層	陶器	白薩摩	碗				3.4					染付千鳥印。近世。
3	2次	B-6水路1	陶器	白薩摩	碗		8.4	5.0	3.1					緻密な白色素地。仙巖窯か。
4	2次	B-5水路1	陶器	白薩摩	碗		7.4	4.3	3.0					緻密な白色素地。仙巖窯か。窯傷あり。
5	2次	B55水路1	陶器	白薩摩	碗		8.4	4.6	3.6					緻密な白色素地。仙巖窯か。色絵らしき痕跡あり。
6	3次	A・B-6水路1埋土中位	陶器	白薩摩	碗		8.6	4.8	2.9					緻密な白色素地で磁器に近い。仙巖窯か。
7	2次	F-6 III層	陶器	白薩摩	平碗?				4.4					黒色微粒子をわずかに含む白色素地。近世か。皿か。
8	3次	D-2・3 I層	陶器	白薩摩	平碗				3.8					緻密な白色素地。仙巖窯か。
9	3次	A・B-6水路1埋土中位	陶器	白薩摩?	碗		10.4	5.3	3.8					緻密な白色素地。やや緑味を帯びた釉。近代以後か。
10	1次		磁器	白薩摩?	皿		11.3	3.9	4.2					灰味を帯びた白色土に薄い緑釉。仙巖窯か。
11	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	白薩摩?	碗				4.7					緻密な白色素地。釉面に細かい貫入。仙巖窯か。
12	3次	A・B-6水路1埋土最下位	陶器	褐釉	碗		11.2	5.1	4.8					白色素地。釉の流れが厚く失敗品。仙巖窯か。
13	3次	A・B-5水路1埋土中位	陶器	色絵薩摩	筒碗	花文	6.4	6.7	4.6					磁土に近い緻密な白色素地。仙巖窯か。色絵の発色不良。
14	3次	A・B-7水路1埋土中位	陶器	色絵薩摩	筒碗	紅葉文	7.4	6.9	4.2					高台内面に「女」刻銘。仙巖窯か。
15	2次	F-5 III層	陶器	色絵薩摩	碗	花文	9.7	4.9	4.0					磁土に近い緻密な白色素地。仙巖窯か。
16	2次	B-6水路1	陶器	染付	碗	?	7.8	6.1	4.1					呉須の発色を見るための試作品か。仙巖窯か。
17	3次	A・B-6水路1埋土最下位	陶器	灰緑釉鉄絵	端反碗	宝貝文か	9.2	5.5	3.8					鉄絵。灰白色素地。高台は近代白薩摩に似る。
18	3次	A・B-6水路1埋土中位	陶器	灰緑釉	端反碗		10.4							灰白色素地に黒色微粒子を含む。近代か。
19	3次	D-2・3 - I層	陶器	褐釉	碗?				4.6					蛇の目釉剥ぎ。龍門司か(近代か)
20	3次	A・B-6水路1埋土最下位	陶器		碗				3.6					白化粧土。高台無釉。龍門司(近代か)
21	2次	F-7 I層	陶器		碗									口縁のみ。灰白色素地に透明釉。
22	3次	A・B-8・9水路2 IV層	磁器	染付	端反碗	草花文	11.2	4.7	4.2					薩摩磁器。近世。
23	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	端反碗	牡丹唐草文	9.4	4.9	3.9					高台内に銘。薩摩磁器。近世。
24	2次	B-6 I層	磁器	染付	端反碗	牡丹唐草文	9.0	4.8	3.8					薩摩磁器。近世。
25	3次	A・B-7水路1	磁器	染付	端反碗	鶴・松文	9.4	4.8	3.8					薩摩磁器。近世。
26	3次	A・B-7水路1	磁器	染付	端反碗	花枝文	8.8	4.5	3.6					内面にも文様。薩摩磁器か。
27	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	端反碗	網文・魚文	11.0	5.5	4.1					蛇の目釉剥ぎ。肥前波佐見。
28	3次	A・B-7水路1	磁器	染付	端反碗	山水文	10.0	5.7	3.7					見込みに簡略化した松竹梅文。薩摩磁器。
29	2次	B-3水路1埋土最下位	磁器	染付	端反碗か	唐草文			3.4					見込みに松竹梅文? 薩摩磁器。近世。
30	3次	A・B-8水路2埋土最下位	磁器	染付	端反碗	唐草文								薩摩磁器。近世。
31	3次	A・B-6水路1埋土最下位	磁器	染付	碗				3.4					高台に櫛文。
32	3次	A・B-4水路1埋土中位	磁器	染付	碗				5.0					玉壁高台。肥前磁器。
33	3次	A・B-5水路1埋土中位	磁器	染付	端反碗	篆書文	8.6	4.1	3.2					瀬戸美濃磁器。口鍔
34	3次	A・B-7水路1	磁器	染付	筒碗	山水文	8.6	7.2	4.6					薩摩磁器。

表3-2 集成館熔鉢炉跡出土資料観察表(2)

No.	調査回数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備	考
35	1次		磁器	染付	湯呑み碗	点文	6.2	5.1	3.4					薩摩磁器。	
36	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	杯	雲竜文	5.7	5.0	3.1					胴部に縦方向の鐮削り。	
37	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	筒碗		6.5	4.8	3.8					肥前か	
38	3次	A・B-6水路1埋土最下位	磁器	染付	杯	巻物・蝶文	8.4	6.1	3.7					文字は「乾隆」か？	
39	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	杯	文字文	7.0	4.0	3.0					高台内に二重圏線の「福」銘。肥前。	
40	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	杯	草花文			3.4					蛇の目軸剥ぎ。中国福建広東産か	
41	2次	F-3 I層	磁器	青花	碗				4.8					口縁無軸。高台内型作り。中国徳化窯。	
42	3次	A・B-7水路1 IV層	磁器	白磁	小杯		7.4	3.8	3.0					プリント。近代以後。	
43	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	釉下彩色絵	碗	松文	10.0	4.8	3.6					近代以後。	
44	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器		碗	丸文	9.8	4.6	3.6					近代以後。補修痕あり。	
45	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器		碗		10.2	3.8	3.4					近代以後。「子ども茶碗」	
46	2次	B-2水路1	磁器	色絵	碗	唐子太鼓文	9.0	4.3	3.3					クロム青磁釉。近代以後。	
47	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	釉下彩色絵	碗	符文	9.6	4.4	3.4					コバルト型紙刷り。近代以後。	
48	3次	A・B-7水路1	磁器	染付	筒碗	唐草文	6.8	5.0	4.0					近代以後	
49	3次	A・B-8・9水路2 IV層	磁器	色絵	碗	柴垣文			4.4					仙巖窯か	
50	3次	A・B-6水路1埋土最下位	磁器	青磁	小碗		6.4	5.0	3.0					やや灰色を帯びた白土。黒色微粒子。仙巖窯か。	
51	2次・3次	2次B-6水路1・3次A・B-6水路1埋土中位	磁器	青磁	小碗		6.6	4.9	3.2					プリント。近代以後。	
52	2次	B-2 II層	磁器	染付	杯	連弁文？	7.6	4.1	3.0					プリント。近代以後。	
53	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	釉下彩色絵	杯	「大日本東濃景色後藤新八造」	7.0	4.6	3.2					プリント。近代以後。	
54	3次	A・B-6水路1埋土最下位	磁器	染付	皿	楼閣山水文	9.4	2.2	3.8					薩摩磁器。内面に切高台付ハマの四角形痕跡4ヶ所。近世。	
55	3次	A・B-8 I層	磁器	染付	皿	唐草文	12.6	2.9	8.2					肥前。近世。	
56	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	皿	草花文			4.4					肥前。近世。	
57	1次		磁器	染付	皿	唐草文	11.0	2.3	5.6					瀬戸美濃磁器。	
58	2次	B-2水路1	磁器	染付	皿	唐人文	10.5	2.1	6.0					外面に文字？。高台内に銘。近代か。	
59	2次	B-6水路1	磁器	染付	皿	松竹梅文	11.2	2.4	6.3					プリント。近代以後。	
60	2次	B-5水路1	磁器	釉下彩色絵	皿	蝶文	10.8	2.2	6.1					色絵プリント。近代以後。	
61	2次	B-7水路1	磁器	染付	輪花皿	花枝文	13.4	3.7	8.6					コバルト型紙刷り。蛇の目凹型高台。近代以後。	
62	2次	B-5水路1	磁器	染付	角皿	陽刻菊花文	8.0	2.3	3.6					型作り。白土盛り上げ。	
63	3次	A・B-6水路1埋土最下位	磁器	染付	杯	水裂梅文	9.0							仏飯具の可能性もあり。肥前か。	
64	3次	A・B-7水路1	磁器	色絵	仏飯具	？	5.2							赤・黒・緑・青の色絵。瀬戸美濃磁器。近代。	
65	2次	B-5水路1	磁器	瑠璃釉色絵金彩	仏飯具	菊花文？	6.4	6.5	4.8					近代以後。	
66	3次	A・B-2 II層	磁器	染付	蓋	菊文								橋形紐。薩摩磁器か？	
67	2次	B-2水路1	磁器	染付	蓋	花文	4.0	2.9	9.3					コバルト型紙刷り。近代以後。	

表3-3 集成館熔鉢跡出土資料観察表(3)

No.	調査回数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備	考
68	3次	A・B-6水路1埋土中位	磁器	染付	鉢	花草文	15.6							薩摩磁器。	
69	2次	B-5水路1	磁器	染付	鉢		21.8	8.2	10.7					コバルト。蛇の目凹型高台。近代以後。	
70	2次	A-2水路1	陶器	白薩摩?	鉢		23.6							黒色微粒子をわずかに含む白色素地。近代か。	
71	2次・3次	2次B-5水路1・3次A・B-6水路1埋土中位	陶器	三彩	鉢		24.2		7.4					白化粧土に緑釉流し掛け。龍門司三彩。近代か。	
72	2次	F-10 III層	陶器	灰緑釉	鉢									口縁のみ。貝目。苗代川。	
73	1次	A-2 II層	陶器	灰緑釉	甕									口縁のみ。口縁に土目。苗代川。鉢か?	
74	2次	B-2水路1	陶器	褐釉	鉢									口縁のみ。苗代川	
75	3次	A・B-8 I層	陶器	褐釉	摺鉢									口縁のみ。苗代川。	
76	2次	F-7 III層	陶器	褐釉	摺鉢									口縁のみ。苗代川。	
77	3次	A・B-8・9水路2 IV層	陶器	黒褐釉	摺鉢		30.0	13.6	18.0					逆L字口縁。苗代川。	
78	2次	D-1 I層	陶器	褐釉	甕									縄目状口縁。縄目状突帯。苗代川。	
79	2次	B-7水路1	陶器	灰緑釉	壺									口縁のみ。	
80	3次	A・B-6水路1埋土中位	陶器	褐釉	土瓶		8.0	12.7		18.5				胴部に重ね焼き痕。溜め口。注口3孔。脚部無釉。苗代川。	
81	3次	A・B-7水路1埋土中位	陶器	赤紫釉	土瓶		6.5			14.0				溜め口。注口3孔。	
82	2次	B-7水路1	陶器	褐釉	土瓶蓋			3.6	4.6	7.0				苗代川	
83	3次	A・B-4水路1埋土中位	陶器	褐釉	土瓶蓋			4.6	3.6	7.1				重ね焼き痕。苗代川。	
84	3次	A・B-5水路1埋土中位	陶器		土瓶蓋			2.4	4.6	6.4				白濁釉(白化粧土?)に銅緑釉を流し掛け。龍門司か。穿孔1。	
85	3次	A・B-6水路1埋土最下位	陶器	鉄絵	土瓶		6.8							口縁のみ。白化粧土に鉄絵と銅緑釉。関西系か。	
86	2次	B-6水路1	陶器	白薩摩	高坏		12.0							緻密な白色素地。仙巖窯か。	
87	2次	B-6水路1	陶器	白薩摩	瓶?		6.2							緻密な白色素地。色絵痕跡。仙巖窯か。壺の可能性もあり。	
88	3次	A・B-6水路1埋土最下位	陶器	油壺	油壺		1.8	5.8	2.8	6.7				暗赤褐色素地に白化粧土。龍門司か。	
89	3次	A・B-8・9水路2 IV層	陶器	黒釉	瓶?				3.8					白色素地。内面無釉。近代か。	
90	2次	F-10 III層	陶器	褐釉	蓋			3.4	10.2	12.2				白色素地。薩摩か?	
91	3次	A・B-6水路1埋土中位	陶器		土鍋把手						7.2		4.0	灰白色素地に透明釉。露胎部は淡赤化。関西系。	
92	3次	A・B-7水路1埋土最下位	陶器	褐釉	瓶?					7.9				胴部～肩部のみ。関西系か	
93	2次	F-9 III層	陶器		鬘罍						3.5	3.1		型紙摺り	
94	2次	B-2水路1	陶器	焼き締め	瓶				6.8					琉球陶器。「鬼の腕」	
95	2次	F-5 II層	陶器	焼き締め	蓋			1.9	12.4					把手の痕跡あり。橋形か?	
96	3次	A・B2' I層	陶器	焼き締め	スノコ									3孔が残る。片面ハケ目。	
97	3次	A・B-5水路1埋土上位	土製品	窯道具	トチン		14.0							粗い白色素地。上面と脚内面にアルミナ。上面糸切り痕(右)	
98	2次	B-7水路1	土製品	窯道具	ハマ		11.2	1.9	4.0					上面に溝状のケズリ4ヶ所。	
99	2次	F-9 III層	土製品	窯道具	匣鉢		17.0	9.0	16.2					胴下部に穿孔。底部アルミナ。	
100	2次	F-10 II層	土製品	窯道具	匣鉢		24.6	14.8						内外面にアルミナ塗布。	

表3-4 集成館熔鉱炉跡出土資料観察表(4)

No.	調査次数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備考
101	1次		レンガ	耐火レンガ								21.8	12.5	将棋の駒形
102	3次	F-2' 硬化面	レンガ	耐火レンガ							22.5	20.2	8.0	将棋の駒形
103	2次	B-2水路1	レンガ	耐火レンガ							12.4	14.8	8.7	
104	2次	F-9 III層	レンガ	耐火レンガ							13.9	12.4	8.3	断面台形
105	2次	B-1水路1	レンガ								22.9	10.8	5.7	
106	1次		レンガ								24.0	11.2	6.0	
107	3次	A・B-8 IV層	レンガ	赤色レンガ								10.8	6.2	
108	3次	A・B-8 IV層	レンガ	赤色レンガ							14.8	11.5	4.5	片面に漆喰付着
109	3次	AB-8水路2 III層	レンガ								15.0	5.5	5.2	断面正方形。片面被熱大。
110	2次	B-1	レンガ										8.8	孔径4.0 cm
111	2次	B-5水路1	土製品	フイゴ羽口										同上
112	3次	A・B-7水路1	土製品	フイゴ羽口			3.7		9.8					同上
113	3次	A・B-7水路1	土製品	フイゴ羽口			3.5		7.6					同上
114	3次	A・B-6水路1埋土中位	土製品	フイゴ羽口			3.8		9.5					同上
115	3次	A・B-6水路1埋土中位	土製品	フイゴ羽口			3.7		9.1					同上
116	2次	B-5- I・B-6- I (接合)	土製品	フイゴ羽口 (大型)			10.0		17.0		16.5			口径：内径、底径：外径
117	2次	B-1水路	土製品	フイゴ羽口 (大型)			7.0		17.0- 24.0		17.3			同上
118	3次	A・B-0 II層	土製品	るつぼ (大型)				16.9	29.2					外面に被熱による剥離・変色
119	2次	B-2水路1	土製品	るつぼ (小型)			9.5	5.8						外面に鉄分付着。
120	2次	B-1水路1	土製品	るつぼ?				8.0			12.9			
121	2次	B-1水路1	土製品	角状筒型 製品?			5.4				5.5			
122	2次	B-1水路 + B-2水路 (接合)	土製品	角状筒型製品							20.5			
123	3次	A・B-5水路1埋土中位	土製品	鑄型?							6.3	4.0	2.4	用途未確定
124	2次	A-1 II層	土製品	鑄型?							7.2	4.5	2.2	用途未確定
125	3次	A・B-0 II層	土製品	碇状土製品							3.9	6.5		長=縦、幅=横
126	3次	A・B-0 II層	土製品	碇状土製品							4.4	7.7		同上
127	3次	A・B-0 II層	土製品	碇状土製品							4.0	4.8-5.8		同上
128	3次	A・B III層	土製品	碇状土製品							4.8	5.5		同上
129	3次	A・B-0 II層	土製品	碇状土製品							4.2	4.0		同上
130	3次	A・B-0 II層	土製品	碇状土製品							4.5	5.5		同上
131	2次	B-1水路1	土製品	環状土製品			8.0	7.0						上面に刻み目5。用途未確定。
132	2次	B-2 II層	土製品	環状土製品			3.0		8.3				1.8	口径：内径、底径：外径
133	2次	B-2水路1	土製品	環状土製品							6.6	3.6	2.2	

表3-5 集成館熔鉱炉跡出土資料観察表(5)

No.	調査回数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備考
134	2次	B-1水路1	土製品	粟状土製品							9.7	4.6	2.5	
135	2次	B-2 II層	土製品	粟状土製品							9.4	5.7	2.8	
136	2次	F-5 I層	土製品	粟状土製品							8.1	6.0	2.5	
137	2次	A-1水路1	土製品	粟状土製品							13.9	6.4	3.0	
138	2次	B-2水路1	土製品	粟状土製品							11.6	7.7	2.6	
139	2次	A-2水路1	土製品	粟状土製品							10.0	6.4	2.1	
140	2次	B-5 III層	土製品	粟状土製品							3.6	2.7	2.2	外周に溝あり
141	2次	B-1水路1	土製品	粟状土製品							7.1	3.1	2.5	同上
142	2次	B-2水路1	土製品	粟状土製品							8.1	3.0	2.4	同上
143	2次	A-2水路1	土製品	粟状土製品							7.8	5.6	3.1	同上
144	2次	B-2水路1	土製品	粟状土製品							9.7	5.6	2.5	同上
145	2次	B-1水路1 + B-2水路1 (接合)	土製品	粟状土製品							16.1	4.4	3.2	同上
146	2次	A-2水路1 + B-1水路1 (接合)	土製品	粟状土製品							14.4	8.3	3.3	同上
147	2次	B-1水路1	石製品	白状石製品	鋳型?									
148	2次	B-2 II層	石製品	白状石製品	鋳型?			10.5						中央部穿孔
149	2次	B-1水路1	石製品	白状石製品	鋳型?			15.0						
150	2次	B-2水路1	石製品	白状石製品	鋳型?			13.9						中央部穿孔
151	2次	A-2水路1	石製品	白状石製品	鋳型?							17.0		中央部穿孔
152	3次	A・B-9 I層	石製品	白状石製品	鋳型?									中央部穿孔
153	3次	A・B-0 II層	石製品	白状石製品	鋳型?		16.5	8.0	16.5					中央に凹形凹み(径9cm)
154	2次	IA-2水路	石製品	白状石製品	鋳型?			10.0						中央部穿孔
155	3次	B-8 I層	石製品	砥石							23.5	7.5	2-2.2	
156	3次	A・B-0 II層	瓦		軒丸瓦						8.7			
157	2次	D-1 I層	瓦		軒丸瓦?						9.6	4.8	2.0	
158	3次	A・B-7水路1埋土	瓦		丸瓦						16.0	8.0	2.0	
159	3次	A・B-6水路1埋土中位	瓦		棧軒平瓦						26.8	19.0	1.8	釘穴有り
160	3次	A・B-0 II層	瓦		軒平瓦						4.6	15.0	8.6	「厚8.6」=奥行さ
161	3次	A-1水路1	瓦		軒平瓦						4.2	14.1	8.7	「厚8.7」=奥行さ
162	3次	A・B-8・9	瓦		軒平瓦						14.0	17.2	2.2	無文。赤色
163	3次	F-0 I層	瓦		軒平瓦						12.0	15.6		無文。漆喰痕跡。
164	3次	A・B-0 II層	瓦		平瓦+丸瓦						14.9	15.2		
165	3次	A・B-7水路1埋土中位	瓦		棧瓦						30.0	30.2	2.3	
166	2次	E-1 II層	土器	弥生土器	甕									弥生中期後半~後期初頭
167	3次	A・B-6水路1埋土中位	土器	成川土器	壺									
168	2次	F-9 III層	土器	成川土器	カゴ					9.2				胴径

表3-6 集成館熔鋳跡出土資料観察表(6)

No.	調査回数	出土地点	種類	種類2	器種	文様	口径	器高	底径	最大径	長	幅	厚	備考
169	3次	水路2 II層	土器	土師器					6.1					
170	3次	GH I層	土器	土師器					6.0					
171	2次	F-5 III層	土器	土師器	碗		14.0	6.4	7.4					
172	2次	F-9 III層	土器	土師器	碗?				7.0					
173	3次	A・B-2 III層	土器	須恵器					12.0					
174	3次	A・B-8 IV層	土器	須恵器					12.8					
175	2次	F-4 III層	土製品	双孔棒状土錘							6.5		1.45-2.0	
176	2次	石段T-IV層	土製品	双孔棒状土錘							5.9		1.45-1.8	
177	2次	F-4 III層	土製品	双孔棒状土錘							3.8		1.25-1.45	
178	3次	G-2 II層	土製品	双孔棒状土錘							3.5		1.0	
179	2次	B-5水路1	鉄製品	カスガイ							11.2	1.7	2.6	
180	2次	B-6水路1	鉄製品	ボルト状製品							17.8	3.5	1.8	幅=頭部直径, 厚=軸部直径
181	2次	B-7水路1	鉄製品	ボルト状製品							11.4	4.2	1.6	幅=頭部直径, 厚=軸部直径
182	2次	F-10 II層	鉄製品	ボルト状製品							14.0	3.4		幅=把手部外径, 内径1.6 cm
183	2次	B-5水路1	鉄製品	リング状製品							4.2		1.6	長=外径, 内径1.6 cm
184	2次	A-2水路1	鉄製品	板状製品							8.4	2.5-3.6	0.1	
185	2次	A-1水路1	鉄製品	和釘							8.1	1.5	0.2-0.6	幅=頭部長, 厚=軸部幅
186	2次	A-1水路1	鉄製品	和釘							10.1	1.3	0.2-0.4	同上
187	2次	A-2水路1	鉄製品	和釘							9.0	1.4	0.2-0.5	同上
188	2次	F-10 砂層	鉄製品	和釘							9.4	1.5	0.3-0.6	同上
189	2次	F-10 III層	鉄製品	クサビ状製品							19.0		1.4	厚=直径
190	2次	B-1水路1	鉄製品	クサビ状製品							12.8		1.6-0.9	同上
191	2次	B-5水路1	青銅製品	板状製品							6.4	1.3-2.3	0.1	全体としてやや波打つ
192	2次	A-1水路1	青銅製品	板状製品							4.4	3.2	0.1	穿孔は腐食による
193	2次	F-9 II層	青銅製品	板状製品							2.0	1.3-1.4	0.1	
194	2次	F-5 I層	青銅製品	板状製品							3.1	3.1	0.1	穿孔は本来のもの。碗状土製品による製品か
195	2次	B-2 II層	青銅製品	板状製品							6.2	1.7-3.2	0.5	長辺を折り返す。厚さは折り返し部
196	2次	B-2水路1	青銅製品	板状製品							2.6	1.0-1.2		短辺を折り返す
197	2次	F-10 II層	青銅製品	L字状製品							5.4	2.0	0.6	幅=最大幅, 厚=直径
198	2次	B-2水路1	青銅製品	棒状製品							5.4		0.4-0.7	厚=直径
199	2次	B-7 II層	青銅製品	リング状製品							2.5	2.1		
200	2次	B-7 II層	青銅製品	リング状製品							3.2	1.4		
201	2次	F-10 II層	銅銭	寛永通宝							2.3			長=外径
202	2次	D-1 I層	銅銭	寛永通宝							2.0			同上
203	2次	B-2水路1	銅銭	鳩目銭							1.8前後			B-2水路から78点, D-1-I層より4点出土

## 5. 発掘調査成果のまとめ

以上、集成館熔鋳炉跡の発掘調査成果について、層位・遺構・出土遺物ごとに報告してきた。最後に、これらの調査成果について、周辺遺構ならびに文献史料を参照しながらまとめておきたい。なお調査地点は、1) 集成館事業以前、2) 集成館事業期、3) 集成館事業以後の三時期に区分することができ、この時期順に述べていく。

### 1) 集成館事業以前

この時期の遺物としては、まず弥生土器、成川式土器、土師器、須恵器などがあり、先史時代から何らかの人間活動が当地であったことが推測される。

近世期の遺物としては、苗代川産の甕や摺鉢、肥前産磁器などが出土している。当地には近接して島津家の磯別邸があり、また『三国名勝図会』（1843年）によれば、島津吉貴の時代に勧請された「白山権現社」があったという（青潮社版第一巻 p.206）。同神社は斉彬の集成館事業の際に雀ヶ宮（現鹿児島市吉野町雀ヶ宮）へ遷祀されたとされる（平田猛1931 p.39）。出土の近世遺物は、集成館期に廃棄された可能性はないわけではないが、上記のように集成館以前であることも考えられる。

なおこの時期の調査地点の旧地形については、今回は情報は得られなかった。ただし基盤となる地山は、北部（山側）では岩盤であるのに対し、南部（海側）では砂質層であることが確認された。

### 2) 集成館事業期（1851～1877年）

嘉永4年（1851）島津斉彬藩主となる。第1期集成館開始

嘉永5年（1852）熔鋳炉着工

安政元年（1854）熔鋳炉竣工

安政5年（1858）斉彬死去、集成館事業縮小

文久3年（1863）薩英戦争、集成館炎上

元治元年（1864）機械工場着工（第2期集成館）

熔鋳炉跡付近に「四斤砲製造鋳物場」「弾丸仕上場」（『薩藩海軍史』）

明治4年（1871）廃藩置県

明治5年（1872）海軍所管となる

明治10年（1877）西南戦争、集成館炎上

第1期集成館事業の開始にともない、本地点は大規模な造成工事がなされる。つまりA・B-7区とF-7区で検出された石垣が構築され、その北側には熔鋳炉建設のための平坦面が構築された。その平坦面の標高は、山階宮碑南方に残る石垣より、8.0m前後と推測される。その平坦面に熔鋳炉（およびその地下基礎となる突き固め遺構）と水路1が建造され、また石垣南側には水路2が建造された。

すでに報告中でも触れたように、これら諸遺構の配置は、安政4年の『薩州鹿児島見取絵図』（以下『絵図』と略称）に描かれた施設配置と一致しており、同絵図の施設配置の信頼性が確認できる。以下、今回確認された遺構と、『絵図』の描写ならびに周辺遺構との関係について、若干の検討を試みたい（図3-28）。

#### ①疎水溝との関係

鶴嶺神社北側の斜面には、集成館事業の水車動力のために鹿児島市川上町関吉から引かれてきた疎水溝の遺構が残っている。薩摩のものづくり研究会の調査で、北西から延びてきて屈曲して南下する疎水溝跡①と、その南方に所在し、北西から東南に延びる疎水溝跡②の2ヶ所が確認された。『絵図』によれば、熔鋳炉背後に二股に分かれた疎水溝が描かれており、その左側（西側）の疎水溝は、熔鋳炉方向へと延びている。水路跡1の主軸と疎水溝跡①南部のそれが一致することから、上記疎水溝が疎水溝跡①であり、水路跡1へ水を供給していた可能性がある。一方、絵図の右側（東側）の疎水溝を、疎水溝跡②と考えるな



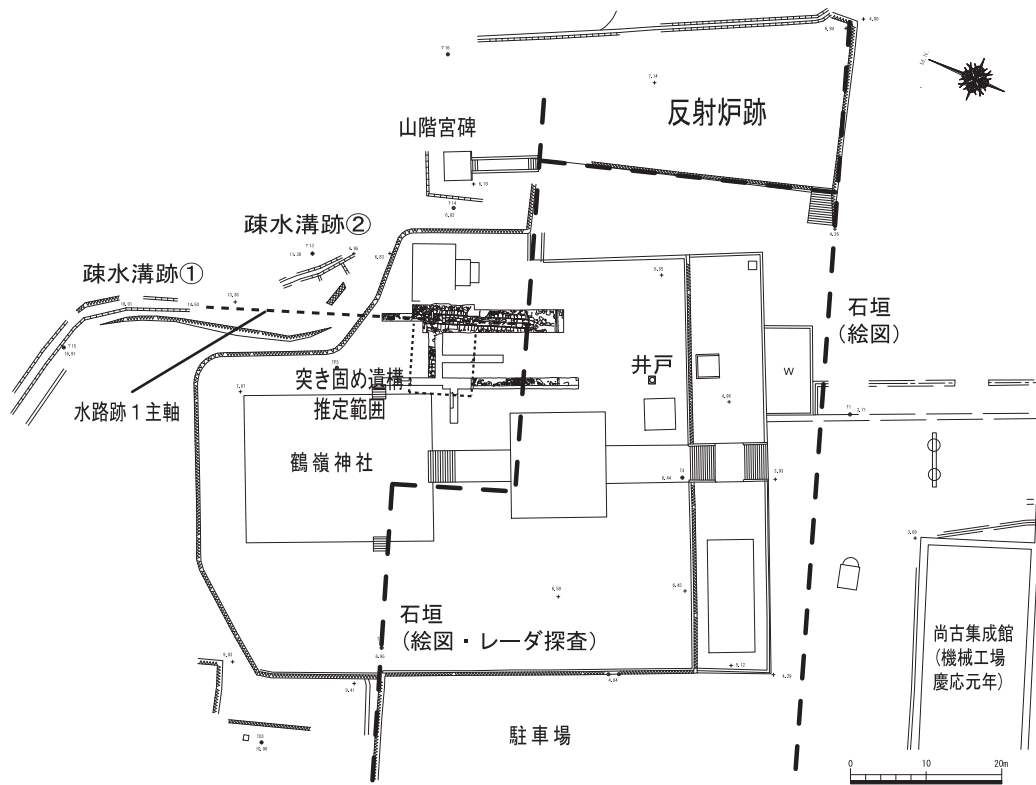


図 3-28 周辺遺構との関係図 (S = 1/1000)

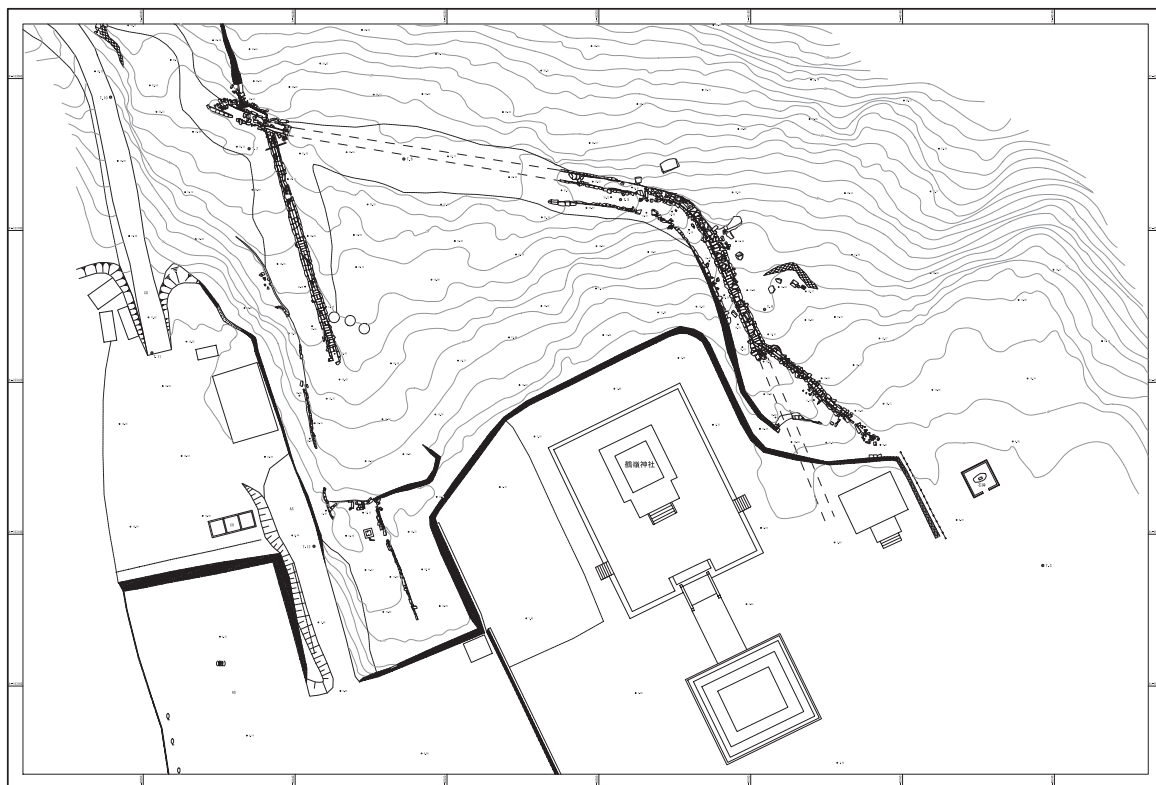


図 3-29 2010年疎水溝跡測量図 (S = 1/1000) (鹿児島県企画課世界遺産登録推進室提供)

らば、疎水溝跡①の南方に①と②の分岐点があると予想された。

その後、2010年、鹿児島県企画課世界文化遺産登録推進室によって疎水溝跡のより詳細な測量が実施された(図3-29)。その結果、疎水溝跡①がより南方に延びていたことが確認されるとともに、上述したように水路跡1の軸線に一致することが改めて確認された。また疎水溝跡②との分岐点も検出されたが、検出時には疎水溝跡①への流れは石壁により遮断されており、水はもっぱら疎水溝跡②にのみ流れるように変更されていた。この遮断・流路変更は熔鋳炉への水の供給が不要になった時期、つまり第2期集成館事業以後と推測される。ただし現段階では明確な時期は特定し得ない。

## ②反射炉との関係

『絵図』によれば、反射炉基壇の西壁は、北に延びたのち東西方向の石垣に直交して接続する。『絵図』では、そのコーナー部分に階段があり、その上に、熔鋳炉脇の水路から水が流れ落ちるように描かれているが、不自然な描写であることは否めない。

しかし今回の発掘調査により、反射炉基壇西壁と水路跡1開口部との間には、東西方向で約20m離れていることが確認され、また開口部下に階段を示唆する遺構は確認できなかった。

以上より、『絵図』の描写は、反射炉や熔鋳炉、水路など大型建築物の位置関係については信頼がおけるものの、細部においては省略・誤謬があったと推測される。

## ③石垣について

先述したように、A・B-7区およびF-7区において確認された石垣は、山階宮碑南方の石垣と同一ラインに位置し、『絵図』における熔鋳炉が建てられた平坦面を造る石垣と考えられる。また鶴嶺神社境内の西側、現在の駐車場北側に残る石垣も集成館当時のそれと考えられ、上記石垣と南北に約16mずれて並行する。『絵図』と地下探査の結果から、神社参道西側で石垣は曲折して、両者は接続すると予想されている。さらに水路跡1は、この石垣に直角に接続していることが確認できる。

一方、反射炉基壇の南壁もまた、上記石垣と並行しており、『絵図』によれば、さらに西方向へ延びている。また反射炉跡基壇西壁は南壁および石垣と直交する。

以上から、反射炉・熔鋳炉・鑽開台・硝子工場などが建てられた集成館の中心部は、東西方向に築かれた石垣を「基本軸」として、それを南北に区切る石垣を加えることで区画されるという、計画性を持った建物配置が想定できる。現段階ではまだ確認されていない鑽開台・硝子工場などの所在地を推定する上で手がかりとなろう。

ところで、第2期集成館の際、1865(慶応元)年に建てられた機械工場(現在の尚古集成館本館)の東西軸も、この石垣とほぼ並行していることがわかる。このことから、第2期集成館における建物配置も、斉彬時代に造成された地形を意識していた可能性が示唆される。

出土陶磁器類については、第1期集成館と第2期集成館を区別することは、現在の編年観からは難しく、一括して扱いたい。磁器では端反碗、湯呑み碗、楼閣山水文を描く染付皿などがこの時期の遺物として考えられよう。陶器の年代比定は難しいが、染付千鳥印を描く、近世期と考えられる白薩摩の碗などがこの時期(ないしはそれ以前)に所属する可能性がある。

陶磁器以外の遺物としては、耐火レンガ、ファイゴの羽口、また反射炉跡でも出土している臼状石製品などが、第1期集成館の時期に含まれると考えられる。一方、第2期集成館、つまり本地点に鋳物工場が建造された時期の遺物としては、硯状土製品など、なんらかの鋳型と推測される遺物、埴塼などが想定される。環状土製品については、用途不明ながら、日用品とするより何らかの工業用品と想像されることから、1期か2期かは不明だが、やはり集成館事業にともなう遺物ととらえておきたい。

集成館熔鋳炉について、今回の発掘調査によって得られた成果は、以下の6点にまとめられる。

- (1) 島津斉彬時代の熔鋳炉本体は、すでに全壊している。
- (2) 石垣跡、水路跡1・2は『絵図』に描かれている石垣、水路と対応する。
- (3) 突き固め遺構は、石垣跡や水路跡との位置関係より、熔鋳炉の基礎工事の可能性が高く、その位置に熔鋳炉があったと考えられる。
- (4) 水路跡1が水車跡であることを示す考古学的資料は現段階では確認できていない。
- (5) 『絵図』の描写は、細部において省略・誤謬はあるものの、その建物配置は基本的に信頼できる。今後、同図に描かれた鑽開台や硝子工場などの所在地推定に有力な手がかりとなる。
- (6) 集成館の中心部分は、東西方向の石垣を「基本軸」とした計画性の高い建物配置がなされた可能性がある。

島津斉彬死去後の集成館事業の縮小、薩英戦争での炎上、第2期集成館、さらに西南戦争での炎上と、調査地点の集成館関係施設は破壊と再建を繰り返す、最終的に放棄されていくが、その過程を示す痕跡は層位的には見いだせない。これは大正6年の鶴嶺神社造営にともなう削平によるところが大きい。

### 3) 集成館以後、鶴嶺神社造営まで (1878～1917年)

- 明治26年 (1893) 島津家庭尋常小学校 (29年より尋常高等小学校)
- 明治31年 (1898) 島津家庭尋常高等小学校閉校 (島津忠重上京)
- 明治40年 (1907) 島津忠重、現鶴嶺神社境内に第2次仙巖焼窯を開窯
- 大正4年 (1915) 仙巖焼窯、鶴嶺神社造営のため、紡績所跡へ移転
- 大正6年 (1917) 鶴嶺神社造営

水路放棄後の調査地点では、自然堆積が進行したようであるが、大正3年(1914)の桜島火山灰降下以前に、整地面と推測される硬化面(A・B-9区南壁Ⅵ層)が確認されたことから石垣南側下面において整地がなされたと考えられる。層位的に側溝もまた同時期に埋設されたと考えられる。後述するように1893-98年には島津家庭尋常小学校が、また1907-15年には仙巖焼窯が設置されているので、それに関連する整地・側溝の可能性もある。

大正6年(1917)に鶴嶺神社が建造されるに及び、調査地点は再び大規模な造成工事が行われる。つまり熔鋳炉建設時の平坦面および水路跡1両壁の上端は、おそらくこの時期に削平された。先述した本来の標高からすると1.5m前後の厚さで削られたと推測される。その当時まで熔鋳炉の痕跡が何らかの形で残っていたとしても、この段階で完全に破壊されたと考えられる。水路跡1の内部は、その際に瓦礫により埋められた。また石垣南側も削平された土および水路壁体の石材などによって埋め立てられ、現在、鶴嶺神社境内の平坦面が構築されたと考えられる。ただし表土層も一定の厚さを持つこと、また神社本殿西側階段の底面が大正整地面よりやや高い位置にあること(図3-7⑤)などから、現地表面が形成されるまでに何度かの盛り土が行われた可能性がある。

一方、文献的に見ると、西南戦争以後の熔鋳炉跡付近の土地利用についての情報は少ない。ただし島津家庭尋常小学校に通った島津忠重の回想録『炉辺南国記』によれば、学校があった時期、「その周囲の空地はぜんぶ砂糖きび畑であった」(島津1957 p.37)という。

さて島津忠重が就学年になった明治26年(1893)に島津家庭尋常小学校が開かれる。同校には忠重の他、市中から20名ほどの同級生が通ったという。校庭と現在の尚古集成館の建物の間に、東西に長く馬場が設けられ、現在の神社社務所付近にあったという校舎には「一般生徒の食堂」もあったという(島津1957pp.16-17)。明治31年に忠重が上京するとともに閉校となった。

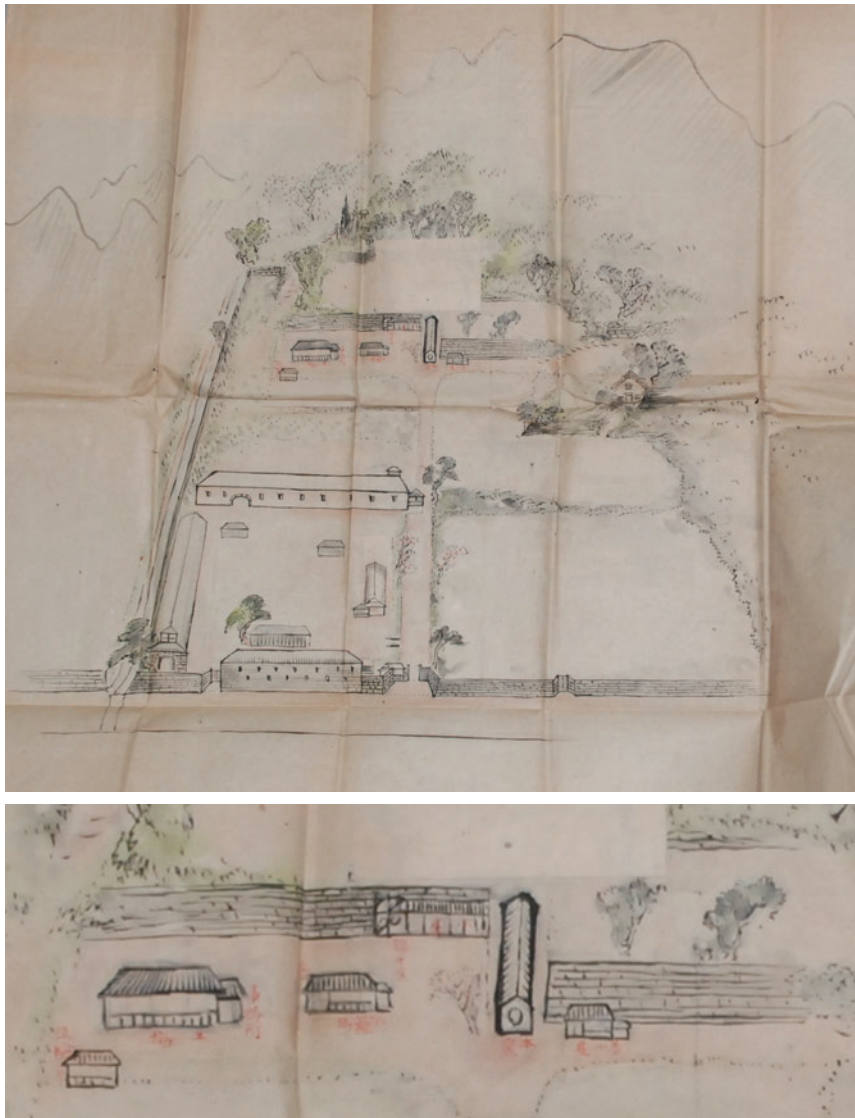


図 3-30 鶴嶺神社造営直前の絵図（下：仙巖焼窯周辺拡大）（尚古集成館蔵）

これら学校跡にともなう遺構は検出されていないが、46の小振りの丸碗は、いわゆる「子ども茶碗」に近く、同校の「一般生徒の食堂」で用いられたものの可能性もある。ただし「子ども茶碗」は明治末期を萌芽期とし、遅くとも大正初期には出現していたという（浅川2005）。もし本遺跡出土の46が島津家庭尋常小学校（明治26-31年）にともなうものとする、若干の時期差がある。また口縁部の吹き絵に銅板転写が組み合う43・45のような碗は、松本市松本城二ノ丸跡（松本区裁判所跡）の出土事例は明治41年（1908）に近いとされている（瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編2009p.52）。以上より、「子ども茶碗」を含む出土磁器碗の年代は、学校の時期にともなう可能性を残しつつも、より新しい時代を含めてとらえておきたい。

学校閉校後、明治40年（1907）には、忠重が現神社境内に第2次仙巖焼窯を開く。尚古集成館に残る図面では、現在の拝殿と本殿とを結ぶ参道付近に連房式登窯が築かれたようだ（図3-30）。また学校の一部が工場の一部として再利用されたという（島津1957p.17、井上1931pp.18-19）。窯道具類（97～100）は仙巖焼に由来する遺物と推測される。また3～6・9の白薩摩碗・杯、10・11のやや青みを帯びた釉薬をかけた平碗も、上記白薩摩との素地の共通性から同時期と推定される。12の高台周辺に釉溜まりを有する褐釉碗も素地に近い。13から15の色絵類も同様である。「テスト・ピース」と考えられる16の染付碗も同窯由来のものであろう。86・87も素地としては上記の白薩摩と共通する。

本窯は大正4年（1915）に鶴嶺神社造営のため、紡績所跡へ移転し、同6年には鶴嶺神社が造営される。